金沢大学英文学会 The Society of English Literature, Kanazawa University

NewsLetter

NO.1 2009.10.01

★会員のみなさま、お変わりございませんか。金沢大学英文学会では、今年度より News Letter を発行することになりました。創刊の第 1 号をお送りします。さる 8 月 1 日に、本年度の運営委員会が開かれました。この号は、そこで討議された内容をもとに編集されています。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ダーウィン生誕 200 年

中村 芳久

『種の起源』で知られる Charles Darwin が生まれたのは、1809 年 2 月 12 日ですから、今年 2009 年は、ダーウィン生誕 200 年にあたります。1859 年出版の『種の起源』も今年は刊行 150 年にあたります。実は Abraham Lincoln もまったく同じ 1809 年 2 月 12 日に生まれています。その奴隷解放の夢は、Obama 大統領が誕生した今年、ほんとうの意味で実現したといっていいかもしれません。南北戦争から約 150 年、ヒトは人種差別を克服し、進化したと言えるかもしれません。それでもヒトはまだまだチェンジし、進化する余地がありそうです。

600 万年前に他の霊長類から分化したヒトは、遺伝子でいうとチンパンジーとの差異はわずか１％。生物的な遺伝子の差異だけならば、ウマとシマウマ、ハツカネズミとドブネズミもその差異が１％ですから、ヒトは驚異的な進化を遂げていることになります。生物的進化（biological evolution）だけなら、ヒトもチンパンジー並みだったはずですが、ヒトは文化進化（cultural evolution）を遂げました。ヒトは、自然と一体化して住んでいた世界から、切り離され、そこはかとない孤独を感じることにもなりますが、その代わり、さまざまな世界を構築しそこで仲間をつくって生息していくすべを見つけました。科学の世界も、芸術の世界も、宗教の世界もそうした文化的世界、つまり文化進化によって構築された世界だと言うことができます。もちろん家庭や学校もそういった世界です。

金沢大学英文学会も、そのような文化的世界の一例ですが、ここでも、いいものは残り、チェンジし進化するところはそうなるだろうというわけです。これまでのアカデミックな総会から、今年は、みなさまからのお声を参考に、午前中の研究発表会、午後の同窓会風の会合の 2 部構成になっています。午前中は大学院生を中心に 6 つの研究発表、それと飛び入りでの山田梁先生のご講演で、たっぷりアカデミックな雰囲気をお味わいください。午後は、在校生のスピーチコンテスト、３つの卒業年度の卒業生からのいろいろな出し物などを楽しんでいただき、縦のつながりをしっかり確認し、親交を深めていただければと思います。

今年は、花の昭和 58 年卒、ごく最近？の平成 9 年卒、そして超最近の平成 19 年卒の皆さんの登場です。今年の総会のプログラムは次ページのとおりですが、どの部分からでもかまいませんので、多くの方に覗いていただければと思っております。ではよろしく。

2009 年度金沢大学英文学会
総会プログラム

日時：2009 年 11 月 21 日（土）
第１部　9:30～13:40
第２部　14:00～17:30
（受付開始は 13:30）
懇親会　18:00～20:00
場所：石川県文教会館
〒920-0918　金沢市尾山町 10 番 5 号
（tel:076-262-7311）

◆

総会第 1 部　研究発表会（9:30～13:40）
9:30～9:40　イントロダクション
9:40～10:10 杉本 親祐（M2）
Sentential Adverbs in Cognitive Grammar
10:10～10:40 屈 莉（D3）
「類別詞の認知機能」
10:40～11:10 川畠 嘉美（D3）
「所有表現の認知構造」
11:10～11:20 休憩
11:20～11:50 森 貞（博士課程修了・福井工業高等専門学校准教授）
「否定辞繰上げ現象－認知言語学的考察」
11:50～12:20 小松 恭代（D1）
「2001 年 9.11 以後のテロ言説から日系アメリカ文学における強制収容の表象を問い直す」
12:20～12:50 中根 久代（福井医療短期大学准教授）
「ジョイ・コガワの『エミリ・カトウ』におけるエスニック性の表象について」
12:50～13:00 休憩
13:00～13:40 講演　山田梁名誉教授
「キーツとシェイクスピア」

総会第 2 部（14:00～17:30）
14:00～14:30
開会の辞
総会　1. 会計報告
2. 会の活動報告
3. その他
14:30～15:00　Speech Contest
審査員：新村知子（石川県立大学）
長岡亜生（北陸大学）
Peter Edwards（金沢大学）
15:00～15:10 休憩
15:10～17:00 卒業生の発表
昭和 58 年卒
平成 9 年卒
平成 19 年卒
17:00～17:20
Speech Contest 審査報告と表彰式
17:20　閉会の辞

◆

18:00～20:00　懇親会
会場：金沢ニューグランドホテル
〒920-8688　金沢市南町 4 番 1 号
（tel:076-233-1311）
会費：5,500 円

《 会員のご活躍 》

★「はだしのゲン」英語訳ボランティアに参加して

1974 年卒　西多喜代子

２０００年に、「はだしのゲン」英語訳ボランティアの声がかかり、是非やってみたいと手を挙げました。ごく普通の家庭の主婦ですが、英語を今までずっと続けてきて本当によかったと思いました。８人の翻訳者が集まり、それぞれ１巻ずつ担当しました。ほとんどの人が英語のプロですが、漫画は初めてでした。でも、約３０年前の初代プロジェクトゲン（いろんな言語に１巻を訳し、英語は４巻まで訳されていた）の中の一人で、日本で

翻訳・通訳の仕事をしていらっしゃるアメリカ人（アラン・グリースン）が、私たちの翻訳のチェックをしてくださったので、とても心強かったです。

印刷までのすべてを手作りで、と思っていたので、プロジェクトゲン代表（浅妻南海江）と私とで、コンピュータに画像を取り込み、ページを裏返し、吹き出しにセリフを入れる作業をしました。

１０巻まで完了した頃、アメリカのラストガスプ社で、出版することになりました。けれども、コンピュータのすばらしい進歩のせいで、私たちの画像は解像度が低いため、もう一度最初からやり直すことになりました。これが、どうしてこんなに長い年月がかかったのか、といつも聞かれる答えのひとつです。

２００９年の夏、とうとう１０巻まで完成し、広島で出版記念パーティーを開きました。そして、オバマ大統領のお嬢様方に１０巻をプレゼントしました。時代の流れにぴったりの好機を捉えられたと思います。大統領自身も読んでくださることを期待しています。

途中で挫折することなく、やり遂げられたのは、ゲンの力強さと優しい心、平和や核廃絶への想いに支えられてのことでした。これからは世界中に広めるのにがんばります。

《 英文科の思い出、近況 》

★卒論の思い出

1983 年卒　柳川三千代

中村先生より「卒論の思い出」についてと原稿お受けしたのですが、卒業して２５年余り、今になって原稿大丈夫かしらなどと思いながら書いてます。

私の卒論の題材はシェークスピアの『リチャード２世』でした。その頃、山田梁先生の授業でシェークスピアを知り、その根底にある、人の運命やはかなさというものに深く興味をもったように思います。今でもその授業はしっかり覚えていますが、考えてみると、この作品の、王たる資質、人間の孤独と悲しみ、運命の残酷さなどは、現代にもそのまま通じていると思います。さすがはシェークスピアですね。「国」を「会社」に置きかえると、経営者の資質、孤独、悲劇、うーん、明日は我が身かとも思えます。

シェークスピアは、年を重ねて（さまざまな経験をして）読むごとに、内容が、リアルに実感として感じられるようになってきました。学生のころを思い出しながら、最近つくづく思っています。

★ナガイくんへ、17 年目の結論

1997 年卒　田辺　愛

浪人時代、予備校仲間の理系男子に、「文学部なんか行ってどうするが？」と、真顔で訊かれた事がある。

彼が疑問視していたのは文学部出身者の将来性か、それとも文学という学問の価値そのものか。たぶん両方だろう。結局ただの主婦となった今、前者については返す言葉もないが、後の一つに関してはそうもいかない。

文学は度量の大きい学問だと思う。結論は求めても、それが正解である必要はない。おそらくこの辺が、曖昧とか実社会で役に立たないとか揶揄される理由なのだろう。だが文学が扱う「ことば」同様、実社会も本来は、何にでも明確な答えが出る訳ではない、とらえどころがないもののはずだ。

何事もまず無駄を排除、結果や利益ばかりが求められ、おまけに「正しく」空気を読む事まで強いられる。疲弊しきった今の社会に違う価値観を示す事ができるのは、ひょっとしたら文学部的な寛容さを持つ者かもしれないと言ったら、彼は鼻で笑うだろうか。

★大学の思い出

1998 年卒　佐々木ちか子

KES ニューズレター発刊おめでとうございます。

私は今、富山県の公立高校で英語教諭をしています。勉強が嫌いだった私が教員になり、生徒たちに少しでも英語の楽しさを伝えたいと奮闘することになるとは、自分でも驚いています。

勉強を初めて「楽しい！」と思わせてくれたのが大学でした。特に、中村先生の語用論の授業では、それまで知らなかった新しいことばの意味のとらえ方を知り、本当にわくわくしたことを覚えています。まじめな生徒ではなかったせいか、先生との話はいつも脱線して、勉強以外の話を聞いていただいたことの方が多かった気がします。それもなつかしい思い出です。

卒業後に遊びに来た自分の生徒が、「大学の先生は質問をしてもあまり相手をしてくれない」と不満を言う時があります（もちろん金沢大学ではありませんが)。それを聞くと、自分は本当に先生方に恵まれていたなと思うと同時に、これからも、先生と学生の距離が近い、温かい雰囲気であってほしいと願ってやみません。

★なつかしの金大英文科ライフ

2002 年卒　嘉戸浩二

金大を卒業して早や７年が経ちました。私は卒業後地元の鳥取県に戻り、中学校で英語教師として５年務めた後、現在は鳥取県立倉吉養護学校高等部に勤務しています。知的障害のある生徒たちと、週に１回英語の歌やゲームを中心に楽しく英語を学習しています。大学時代は体育会サッカー部に所属し、部活とバイトに明け暮れる日々でした。授業にロクに出席せず卒業が延びてしまったことも、今思えばいい（？）思い出のひとつです。卒論は英語のスポーツ実況の中で使われるほめ言葉について書きました。卒論で扱ったことが直接現場で使えることは少ないですが、中学校勤務の時に教科書にメジャーリーグについてのユニットがあり、そこで実際のビデオを見せながら授業したのを覚えています。英文科の仲間達は各地で教員として頑張っていて、今も連絡を取り合う仲です。もしもう一度大学時代に戻れるなら、またあのメンバーで、研究室で鍋とかしたいですね！

★学ぶ姿勢はいつまでも

平成１９ 年に卒業した戸田清香と申します。研究室で学んだ日々がほんの少し前のことだと思っていましたが、気づけば社会人３年目を迎えており、月日の経つ早さに驚かされます。

さて、私は今、地方自治体の職員として勤務しています。申請や相談に来られた住民の方々とお話し、パソコンの画面をにらみつけ、電卓をたたく日々です。英語から遠ざかった生活ですが、代わりに手話という言語に出会うことができました。

音声を用いずに手の動かし方で強弱をつけたり上下左右といった空間を利用したりと、音声言語を学ぶ際とは異なった新しい感覚です。表現を覚え始めた頃、職場の窓口に来られたお客様に手話でお話してみました。上手く伝わった時のうれしいことといったら！このうれしい感じ、なんだか覚えがあるなと思ったら、そうです、覚えたての英語で初めて外国の方と話した時のあの感動と同じでした。

卒業しても、学ぶ機会はなくなりません。また、学んだことが身についていると実感できた時のうれしい気持ちというのも、いくつになっても変わらないものです。これからも、学んで良かったとい

うあの気持ちを追い求め、学び吸収していく姿勢を忘れずにいたいと思います。

《 平成 20 年度卒業論文題目 》

浅谷広朗　An Analysis of Thoughts in *Robinson Crusoe*
内田詩織　An Analysis of the Conflict between Different Values in E. M. Forster's Novels
小坂祥子　An Analysis of English Onomatopoeia in Comics
越　晴菜　The Unparalleled Tale of One "Visionary," Edgar Allan Poe
榊原佳奈　The History of the English Perfective
佐藤あすか　An Analysis of the Meaning of *Frankenstein* by Comparing the Movies with the Original Novel
高木咲佳　A Study of the Meaning of *Extend*
竹内佐織　The Theme of *Never Let Me Go*: What Kazuo Ishiguro Shows to Us
竹内宏和　The Origins and Transitions of European Adventure Literature in the Works of Jules Verne
田保亜有美　*The Picture of Dorian Gray* and the Dual Nature
寺嶋芙希　An Analysis of Female Characters in *The Great Gatsby*
中川瑶子　An Analysis of Ideals and Thought of Maugham in *The Moon and Sixpence*
橋本彩　Why Do They Return? : On Poe's "Morella" and "Ligeia"
松見理香　The Breakthrough of a Little Girl: From the Conventional Tie to the True Right Way
丸山恵里香　A Study of English Demonstratives *This*, *That* and *It*: Comparing with Japanese Demonstratives *Ko*, *So*, and A
水上　愛　The Utterance Characteristics of a Child Bilingual: A Case Study of a Chinese Child in Japan
水橋美穂　The Theory of Interpreting Proverbs
森田章吾　An Analysis of Shakespeare's View of Human Beings in *Julius Caesar*
森本春香　"Who Knows but That I Speak for You?": The Invisible Man as a Spokesman for Contemporary Society
矢野明日香　Factors for Japanese Names
湯浅萩穂　The Constitution of Laughter: Collision and Gap
荒川卓也　A Comparative Study between *The Catcher in the Rye* and *Norwegian Wood*
山本雅人　A Study of Locations in Object Slots

《 平成 20 年度修士論文題目 》

野坂雄二　A Cognitive Approach to English Relative Clauses
川崎菜美子　Similarities between the Nocturnal Style and the Daylight Style in Fiction of Truman Capote

《 第 6 回スピーチコンテスト結果 》

2008 年 11 月 22 日開催

1 位　中村　昌代
Family traditions
2 位　坂本　彩香
The experience in Seattle

《 留学体験記 》

★留学を終えて

修士２年　杉本親祐

There are numerous factors that changed me through staying in the U.S. However, the most significant point is that I realized we should be honest for communication through language. I learned it from helplessness I felt in various situations, such as in conversation with my friends, in class, in living with my roommate and so on and so forth. I talked to them carefully so that they could understand what I intended without misunderstanding.

Since English is not my mother language, I had to put large efforts into even everyday life. As I spent my life there, I learned to know that it is very important to try to tell exactly what we want to say to others. I thought that we tend to neglect making efforts in communications because Japanese is our first language and therefore it is pretty easy to communicate with others; there is no need to work on communications seriously.

However, the nature of language is not there. As long as it is a tool for communication, we should be honest for the use of language and always take much caution not so as to give misunderstanding or tell wrong ideas which are not intended.

Of course, the idea of connotation or implication also should be thought precious, but I think we must not forget the significant nature of communication.

★異文化交流における姿勢

４年　東田麻未

William and Mary 大学での１年は、まさに「充実していた」という言葉が当てはまる、よく学び、楽しんだ日々でした。授業は intense で、知識・態度ともに成長できたし、普段の生活も全てが新鮮でした。ここで、留学全体を通して学んだ姿勢を２つ簡単に書きたいと思います。

まずは、自分の意見を口に出して言うこと。意見が言葉に出されなければ、何も考えていないのと同じです。相手がわかってくれるだろうと勝手に想定せず、正しい英語でなくてもとにかく意見を言うことが、自分の存在意義を示す基本的な方法なのだと学びました。

そしてもう一つが、自分を含む環境に誇りを持って生きることです。日本人であること、金沢大学生であることに自信を持つことで、生活の質がぐっと上がったように思います。自分の心持ちひとつで、自身も周りも接し方が変わるのだと感じました。

留学で得たものは多く、人生において非常に価値のある経験だったと堂々と言えるものになりました。

★Experiences at “Tuf”ts University

４年　小林隆

私が 1 年間勉強したアメリカ・タフツ大学の授業は、その名前から現地学生の間でもジョークになるほど“Tuf”（tough）なものでした。例を挙げると、週に 3 回行われる“Romance Linguistics”の授業は、それぞれ教科書 1 章（30 ページ）と関連資料を 3 つほど（各 20 ページ）が予習課題として出されました。課題の量もさることながら、私が驚いたのはそれに見合う現地の学生の勉強量です。図書館は常に空席を探すのが難しく、平日は閉館ぎりぎりの午前 1 時まで多くの学生が残っていました。留学生のための授業がなかったので、私は現地の学生以上の勉強量を求められました。それはときに精神的・肉体的疲労を私にもたらしま

したが、そのような環境に自ら身を置くことで、留学までの日本での怠惰な生活を反省し、「なぜこんな辛い思いをして勉強しているのか」という本来の留学の目的を思い出し、勉強また交友関係を充実させることができたのだと思います。

《 2008 年度会計報告 》

2008 年 11 月 22 日の金沢大学英文学会総会で、2008 年度（2007 年 11 月 28 日から 2008 年 11 月 19 日まで）の会計報告がなされ、承認されました。

2008 年度金沢大学英文学会収支決算書
2008 年 11 月 22 日

収入	1,628,066 円
支出	390,125 円
2009 年度への繰越	1,237,941 円

【収入内訳】	(円)
2007 年度より繰越	1,166,428
07 年度 KES 会費	124,000
07 年度総会懇親会費	85,000
08 年度 KES 会費	251,000
郵便利息	1,638
合計	1,628,066

【支出内訳】	(円)
07 年度総会懇親会費（振込手数料込）	193,175
07 年度スピーチコンテスト賞品（図書券）	21,000
07 年度奨励賞賞金	30,000
奨励賞関係雑費	7,260
『はだしのゲン』購入費	5,945
08 年度総会関係	
プログラム印刷費（葉書代含）	74,605
プログラム郵送料	51,840
発送準備経費	5,730
領収書用紙購入代金	570
合計	390,125

《 事務局より 》

1. 新役員について

今年度より、以下の新役員で学会を運営していくことになりました。会員各位におかれましては、ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

★金沢大学英文学会役員一覧

会長	中村芳久
副会長	谷内輝雄
事務局	堀田優子
会計	和泉邦子
編集委員代表	高田茂樹

運営委員：柿崎謙一、西多喜代子、市川泰弘、正木（澤田）恵美、田辺愛

在学生（院生）委員：森 貞、川畠嘉美、屈 莉、小松恭代、杉本親祐、相川隆行、宮田愛子、山田正敏

2. 会費の納入について

同封の振込用紙にて 2009 年度の会費 2,000 円の納入をお願いいたします。学会の財政が逼迫しております。お志のある方は維持費（一口 2,000 円）もどうぞよろしくお願いいたします。

なお、昭和 30 年代の卒業生の皆様におかれましては、永年会員制度があったと伺いました。逼迫した財政状況のなか、学会運営継続のために、大変申し訳ありませんが、お志をいただければありがたく存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

3. 総会、懇親会の出欠について

同封の葉書に 50 円切手を貼り、総会及び懇親会の出欠をご記入の上、11 月 10 日（火）までにご投函をお願いいたします。その際には、ご氏名（旧姓）、卒業（修了）年度、ご住所、（もしあれば）メールアドレスをご記入願います。また、ご近況も

ぜひお書き添え下さい。

また、同様の内容を事務局宛に E メールでご連絡いただいても結構です。どうぞよろしくお願いいたします。

4. 『KES』27 号について

会員の皆様には、3 月に『Kanazawa English Studies』27 号をお送りする予定です。今年 3 月にご退官された本間武俊先生の退官記念号になります。どうぞ楽しみになさってください。

5. 2010 年度総会での研究発表について

2010 年度金沢大学英文学会総会で研究発表を希望される方は、2010 年 6 月 30 日(水)までに、事務局までお知らせ下さい。

6. その他

総会プログラム・ニューズレター発送にあたり、住所（転居先）不明の方が増えてきております。住所変更等ありましたら、お手数ですが、事務局までご連絡願います。

《 編集後記 》

News Letterの試みいかがでしょうか。今後さらに充実したものにしていこうと思っておりますので、ご意見宜しくお願い致します。(同封のハガキに、近況とともにお送りください。)

今回は、住所録の整理を田辺愛さんにお願いし、ニューズレターのデザインを柳川三千代さんにお願いしました。いずれにもいろいろ注文を付けすぎて、かえって最終的な出来が落ちたかもしれません。ご協力ありがとうございました。今後も少しずつ外の方のお力とアイディアをいただこうかと思っております。

今回いくつかコーナーを用意しましたが、「会員のご活躍」も「英文科の思い出」ももっともっと充実していこうと思います。ご情報をお待ちしておりますし、また400字程度の「思い出、近況」も、どしどしお寄せ下さい。こちらからも情報をお送りし、卒業生の皆さんからもいろいろな情報をいただき、ニューズレターが良き情報交換の特長ある一つの場になることを願っております。(芳)

金沢大学英文学会 *NewsLetter* No.1

〒920-1192 金沢市角間町
金沢大学人文学類 英語学英米文学研究室内
金沢大学英文学会事務局
メールアドレス：
horitay@kenroku.kanazawa-u.ac.jp
ホームページ：
http://web.kanazawa-u.ac.jp/~english/index.html